

障害理解を促すための具体的な戦略**ー医療福祉系イベント「Mystic Minds」参加者を通しての検討ー**

○ 東京福祉大学 熊谷 大輔 (会員番号 8332)

キーワード3つ: 医療福祉系イベント 障害理解 ソフト戦略

1. 研究目的

近年、「障害」についてはメディア等でも取り上げられることが増え、障害に対する認知は広まってきている。しかし、未だに障害(者)のある人に対する周囲の理解は十分であるとは言い難く、否定的な障害観(差別・偏見・誤解)を持つ場合も少なくない。

これら背景には日常生活のなかで障害者との接触機会の少なさが挙げられるなか、山内(2000)が指摘するように障害者との偶然的接触経験はネガティブな体験となることも少なくない。一方、徳田(2005)は障害理解について、第1段階:気づきの段階、第2段階:知識化の段階、第3段階:情緒的理解の段階、第4段階:態度形成段階、第5段階:受容的行動段階について論じており、障害(者)の理解を促す方法として当事者との接触以前に障害(者)に対する「気づき」をどのように設定するのかという論点がある。

本研究では、障害(者)理解を促すための「ソフトな戦略」の有効性について NPO 法人 U が主催する医療福祉系に特化した謎解きイベントへの参加者を通して検討する。

2. 研究の視点および方法**【調査の対象】**

ららぽーと TOKYO-BAY にて開催された参加型医療福祉系謎解きイベント「Mystic Minds (2018年4月15日)」へ参加された340名のうち、保護者(大人用)アンケート調査票を提出した151名を対象に実施した。

【調査の方法】

医療福祉系イベントの活動を展開する NPO 法人 U による「Mystic Minds (2018年4月15日)」を取り上げ、参加者に対するアンケート調査をもとに「ソフトな戦略(その場で実践されるプログラム構成の効果)」の有効性について、無記名による自記式質問紙調査を実施し、障害(者)理解を促すための具体的な戦略について検討した。

【調査期間】

調査実施期間は、平成30年4月15日の1日間である

【調査項目】

調査項目は、基本属性である「年齢」、「性別」、「居住地域」、「職業」の他、1)医療福

社系イベント参加に対する「認知経路」、「参加目的」、2) 参加前後で生じた変化として「福祉イメージ」、「福祉への興味」、「障害者への理解」、3) 参加後の「自由記述」の3項目の計10項目である。

3. 倫理的配慮

調査者には、研究の目的、主旨、内容、方法を文書及び口頭にて説明し、本人の権利の尊重と調査協力への任意性を保障した。なお、調査協力の拒否・辞退による不利益は一切生じず、調査票はイベント終了後、回収箱を設置し回収し、回答者が特定されないよう配慮し、倫理的配慮については、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守した。

4. 研究結果

参加者の特徴として「30代(36.4%)」と「40代(34.4%)」が多く、「男性(40.8%)」、「女性(59.2%)」であった。職業としては「会社員(44.2%)」と約半数であった。次に今回のイベント参加における認知経路については「当日会場で見かけた(46.0%)」が最も多く、来場の目的は「謎解きに興味がある(67.7%)」という結果であった。

イベント参加前後での医療福祉に対するイメージ変化については「良くなった(60.4%)」、「まあまあ良くなった(37.6%)」と9割以上の者がポジティブなイメージへと変化し、具体的な理由として「これまで障害のある人と触れ合う機会がなく、知る機会もなかった」、「体感することができた」、「もっと私たちに手伝えることがあるかも」と回答した。これらイメージ変化は40代以下の参加者において高い傾向($r=.028, p<.05$)にあった。

5. 考察

大谷(2001)は交流教育における知的障害児に対する健常児の態度形成にて、健常児の障害児に対する好感度を高め、障害児を受け入れようとする心構えの形成を促すためには障害児との交流前の事前学習の必要性を指摘する。さらに、川上ら(2017)は障害に対する事前知識の有無が障害理解の有無に影響することを指摘する。

今回のイベントが参加者に与えた効果を考えるならば、障害について関心を寄せるきっかけとなるような取り組みを増やしていくことが障害(者)理解への第一歩であり、気づきの段階を設定していくことに他ならない。

その意味でも、NPO法人Uの実践は「謎解き」というソフトな戦略を用いながら参加者に対する身近な環境を設定し、体験を通して、障害(者)への気づきを促す戦略であった。今後も障害(者)理解について個人を対象に促していくことは容易ではない。しかし、NPO法人Uが実践したように体験を通して日常の中に障害(者)への新たな気づきを設定することは今後の障害(者)理解を促す手法のひとつである。さらに障害(者)に対する事前知識の提供という面においても効果的な戦略であることは否定できないと言えよう。